

「失われた時を求めて」における

作中人物の言語について (その二)

藤 本 貢

小説家の使っている言語を研究しようとする場合、考察の対象を二種類に分けることが肝要である。その一つは、作家自身が作中

ものを云う箇所に使われている言語、即ち *réels analyses descriptives* の部分である。これは作家の精神や想像力が直接的に現れている部分であつて、一作家の文体を論じる際には、勿論これに基かね

ばならない。しかしもう一つ、これと並んで、やはり無視することの出来ない、なかなか興味ある部分がある。それは作中人物の会話から成つている部分である。(これには、作中人物が書く手紙の文章をも含めねばならない場合がある。) 曾つては、小説において、その主人公達が作者と同じ言語で以て語り、書きした時代があつた。

しかしこうしたことは今や過去のものとなつた。今日では、いやしくも小説家の名に値する、又はその自覚を以つて書いている小説家は、努めて、自分が創造する作中人物の各々に、その性格や知性に即して、あるいはその環境 (*milieu*) に即して語らせようとする。

尤も、それはいつも成功しているとは限らない。何故なら、それは決して容易な仕事ではないからである。「失われた時を求めて」のプ

ルーストほどに、この点において成功している作家は少いのではないだろうか。

一般に小説の作者はその主人公達に、*moment de crise* において語らせるものである。即ち、*narration* に *action* の進行を委ねておけないとき、ドラマティックな展開を必要とするときにおいて語らせるものである。バルザックの手法がその典型的な例であり、スタンダール、フローベールも大体それに準じるものと考えられるし、近くはモリアックもそうだと云える。プルーストは、これに反して作中人物達に、彼らの日常生活の極めて平穩、平凡な時に語らせているのである。この小説にまず出て来る会話は、語り手マルセルの祖父、祖母、伯母たちの、スワンとマルセルの両親達との、何の愛哲もない、普通ありきたりの会話、老女中フランソワズの陳腐な意見の開陳であり、フランソワズと「オクタヴ奥さん」とのコンプレにおける日曜の朝の瑣末な出来事についての雑談である。もつと進むと、ヴェルデュラン家の晩餐会にせよ、ゲルマント家のパーティにせよ、彼はその出席者達のお喋りを、詳細に長々と書く。

がそれが、陳腐な、散文的な、日常茶飯のものであることには変りはない。そこには、巧みに構成されていて意見の衝突を効果的に導くような会話も、人間の感情が烈しくいがみ合い、ハラハラさせるような対話もない。会話は、直接にプロットを進行させるようには作られていない。少くとも、一般に考えられているような具合には、そうした役割をもつていない。それでは、こうした会話は大して意味のないものだろうか。そう考えてしまうことは、このブルーストの作品に関する限り、間違いであろう。かくも、苛酷なまでにリアリスティックな筆致で以つて正確に、一見無意味に見える日常生活の、劇的なものをもたない会話を再現したのは、それを克明に解明することによつて、それのもつ人間精神の、人間心理の、社会的生活の、真の意味を、場合によつては、その無意味性という意味を明らかにしようとしたのである。そして、各人物の話し振、話し癖、発音の強弱、抑揚によつて、彼らの中にある気質、個性、性格の本質が暴露されることを示そうとしたのである。

要するに、ブルーストのこの小説の人物形成に、各人物の会話における癖、特徴が果している役割は、他のいかなる小説の作品よりも大きいのであつて、これを抜きにしては、最も主要な人物は勿論、微々たる端役に到るまで、作中における、いわばヴァルルやトーンを失うばかりではなく、そのデッサンの鮮明さをも曇らせることになるであろう。そうなればこの小説はその半ばを失うことになるといつてもよからう。

そこで、ブルーストが作中人物をして、どのように綿密に、適切に巧妙に語らせているかを考察したのであるが、これを全般にわたつて詳細に述べることは、一巻の書にも備するものであらうから

ここでは、その概観だけをしてみようと思ふのである。

I 発音

会話における言語は、単語と文章とだけで出来ているのではない。accent, intonation, débit, gestes de la voix 等の要素が複合して全体の構成に参加しているのである。言語学者シャルル・バイイは、その文体論において、*minique* と *intonation* との会話の言語における役割の重要性を強調し、それらは「言葉に絶えず附加されていく註釈であり、従つて、(その言葉の表現する) 思想の註釈である」といつている。又、フェルディナン・ブリュネは「*ton* は表現に *valeur* を与える」、「強度、(有聲、子音の) 無声化を伴い、シラブルや単語を伸ばしたり高めたりして適切な *ton* を与えること、いわゆるアクセントをおくこと、止ること、速さを緩めること、速めること、際立たせること、あるいは反対に目立たないようにすること……、これらは、*syntaxe* の構成に参加することである」と。更にまた、心理学者、アンリ・ドラクロワは「言語と思想」の中で次のようにいつている。「会話においては、まず *ce qu'on dit* が来る。次に *minique* と *variation du langage affectif* によつて表現されるものが、そして最後に *sous-entendus* が来る。これには *la parole logique et affective* によつて近づくことが出来るのである」これらの学説のいわんとするところは、今日では常識となつていゝことかもしれないが、*langue parlée* の重要性が、言語学者によつて一般に認められたのは、今世紀に入つてからのことであらう。このことを主張したバイイの *Le langage et la vie* という本は一九一三年に出たものであり、上記の彼の文体論は一九〇九年に、また、ブ

リノの *La Pensée et la langue* は一九二二年に出ており、ドラクロワの上掲の著書は一九二四年の出版になつてゐる。これらの学者達と時代を同じうして「失われた時を求めて」の作者が *intonation*, 《*Jeux expressifs de la voix*》の問題に着眼し、力を注いでゐることは、大いに注目すべきことであらう。しかし彼が、「見出された時」のゴンクルの日記の *pastiche* の直後に

「人びとが話している専柄は私の耳にとまらないで消えていくのだつた。私の興味を引くのは人びとの言つてゐる意味ではなくて、その言い振りだつたからで、その言い振りが、少くともそこに彼らの性格なり、おかしきなりがにじみ出ている場合に限られていた」といつてゐるところから推すと、こうした点に彼が意を注いだのは、時代の影響というよりはむしろ、生來のタムペラマンによるものだつたのかもしれないのではあるが。ともあれ、彼は *les gestes de la voix* が顔の特徴と同様、遺伝と後天的習慣とを反映してゐることを見抜いてゐた。更に「我々のイントネーションは我々の人生哲学を含んでゐる。すなわち、人がたえず専物について考へてゐることを」といつたのである。

このようにブルーストは非常な注意力を以つて、自分の創つた作中人物の声をいわば観察する。まず、彼の注意を惹くものは、各人のもつてゐる声の個性である。特に女の声のそれである。語り手マールセルは、このことを、アルベルチヌの友人であるアンドレという女性と電話で話したときに、痛感して、次のように述べてゐる。

「私はそのときまでアンドレの声がこれほどほかの人の声とちがつてゐることに気がつかず、いままらのように深い感動をおぼえたからである。そこで私は、ほかの人たちの声を思い出した。ことに

女の声——或るものは逐一くわしく問いかけるのに精神を集中してゆるやかになつた声、或るものは話の抒情味にながされて息切れがし、とぎれさえする声。私はバルベックで知りあつた乙女たち一人びとりの声、シルベルトの声、祖母の声、そしてゲルマント夫人の声を一つひとつ思いおこした。それらの声はみなちがつてゐた。それぞれの人に特有な言葉遣いそのままに型どられ、思い思ひの楽器をかなでている。あらゆる「声」が幾十幾百幾千となく、とりどりの響きも高らかに相和して讃仰の言葉を神にささげるのを聞いていると、むかしの画家が描いた三四人の奏楽天使たちが天国で聞かせる楽の音はいかに貧弱に聞えることかと私は思つた。」

次に、声を観察することによつて、ブルーストは、その人物の性格、生理をも明らに出す。この点で最も特徴的な例はシャルリュス男爵の場合である。彼の声は「中音部を十分に練習してゐないあゝ種のアルトの声のようであつて、その歌は若い男と女とが交互に歌う二重唱のようにきこえる声。このように、繊細な思想を表現する時には、彼の声は高い調子をとり、思いもよらぬ優しさを帯び、愛情を打明ける許婚の女達や、姉妹達の合唱を含んでゐるよう思われるのだつた。」あるいはまた「その声の中に少女達の可愛い合唱隊をかくまつてゐるように見える」シャルリュス氏が話してゐる途中に、「しばしば、そうした少女達の、寄宿舎生のような、お転婆女学生のような、鋭い、若々しい笑いが、その半面にいる能弁と狡智の隣人の意地悪さを調節してゐるのが聞かれた。」しかし、こうした女らしさは、シャルリュス氏にとつて、傷心の種である。彼は巧みに、最も悲愴的なトモロから、人の心をとろかすような甘い声音から、野獣の吼声にと移る。そして彼の声は耳を聳するはげ

しい嵐のように、あるいは高く、あるいは低くなつた。」こうした彼の声の独自性は、何よりもまず、フレンヌの大貴族として育つたソドミストとしての彼を暴露するものである。即ち、彼の中には、男に對して女として振舞いたい女性が潜んでおり、且つ、そのことを貴族社会の人々の前で隠そうとして、名門の家の出であることを支えにして、男性的傲岸さを誇張する習慣が出来ているということ。晩年には、男爵は、人に話すとき、相手に對して横暴なまでにヒドクわめくようになってしまふ。このように、シャルリュス氏の声を綿密に観察することによつて、一つの性格を描き出すだけでなく、一人物の生理の發展まで明かにしているのである。

次に、大いにとり上げられているものに、発音上の偏執 (manie) がある。それは各人物の滑稽な短所、特に虚栄心の反映である。シャルリュスは「最も無礼な言葉が発音するには、子音を三つも四つも重ねる」《bougeois》という形容詞を発音するときには、un petit sifflement d'imperinence を以てする。これらは彼の特徴的な癖であつて、傲慢と虚栄との特異な混合から発しているのである。カムブルメール夫人は、サン・ルー (Saint-Loup) という名を最後の P を発音した方がより上品だと思つて、「サンルー」と呼んでいた。これはスノッブの虚栄である。同様の理由でゲルマント公爵はブロック (Bloch) を「ブロッホ」とドイツ流に発音して得意になつてゐる。ゲルマント夫人が、或る文字を発音しないで《C'est le petit Léon, beau-frère de Robert》を《C'est Léon, 1...b...fête à Robert》といふのは、これもスノビズムのためである。スワンは同様に《Comment allez-vous》を《Commen allez-vous》のように、t をリエゾンしない。これを、マルセルが、シックだと思

つて真似る。カムブルメール家の人々は、上流社交界の人々が、貴族の名に冠する de の e を落して《Monsieur d'Chenouville, d'Chenoucaux》と発音するのを真似損じて、《Ch nouville, Ch noucaux》としか云わない。

こうした省略とは反對に、作家ベルゴットは、例えば、visage という単語を発音するのに *visage* の子音を汎山あるかのように発音する。ベルゴットの場合は、その発音の仕方と或る程度まで、彼の兄弟姉妹と共通の癖をもつてゐる。即ちベルゴット家の癖である。

ローム大公夫人は *Charmant* という単語の最初の子音 *ch* を二重に発音する。これは「繊細さのしるしなのである」。ブロックは *Legandin* という名を *LLegandin* と発音する。彼の場合、このように人の名を呼ぶのは、皮肉と文学者気取とのしるしなのである。

スワンはある種の単語を持ち強く引き離して別個に発音する癖がある。「彼が重要な主題についての一つの見解を含んでいるような語を用いるときには、その語を、機械的で皮肉な抑揚で以て他の語から孤立させるようにする。あたかもそれが引用されたものであるかのように、即ち、それに対しては自分の表現として責任を負う意志をもたないかのように」。例えば「私はいろんな芸術の等級 (hiérarchie) をあまり信じませんからね」「ほら、愚劣なひとたちのいうあの等級ですよ」の場合の *hiérarchie* のような語をそのように発音するのである。そしてスワンに好意を寄せてゐるローム大公夫人は彼に影響され、この云い方を無意識の裡に真似る。或る人達においては、発音の仕方の推移が社会的あるいは生理的発展の跡を示している。オデットはスワンと知り合ひになると、彼を真似

て、英國式に発音する。娘達が、或る人が *intelligente* (聰明) だと云う際に、「の音を二度発音するようになる」と、これは、心身共に一人前の女になつたということを示すものである。

以上のような、気取りとか、愚劣とか、スノビズムとかを反映している発音上の諸特徴には、多少とも本人がそのように発音しようという意志が働いていると云える。しかし、これに反して、無邪氣、臆病の現れとしての発音もある。この場合、本人は不意ながら、あるいは無意識のうちに、そのような発音をしてしまうのである。ヴェルデュラン家の、「小さな党」の忠実な一員であるサニエットやピアニストの叔母なる人物がその例である。

人はまたその出身地によつて発音の仕方を異にする。このことは、花咲ける乙女達において観察されている。ロズモンドは北国のアクセントを、アンドレはペリゴールのイントネーションを夫々もつている。

言語の過去の状態の残存は、普通、方言として存在する。老女中フランソワーズの場合がその代表的な例だが、ゲルマント氏夫妻が百姓たちの発音によく似た、古風な、土の匂いのするような発音をすることがあるのは、古い家柄の大地主、領主としての誇りがそうさせているのである。これは、自分の属する階級に対する誇りの反映である。

一人物をとり上げて、その発音の仕方を詳しく調べてみると、その個性的なものとは外から種々の影響、すなわち、地方的、階級的、年令的、職業的、更には教育の程度、交友関係等による影響とが複雑に組合され、絡み合つてその人の発音の独自性を形成しており、それらの影響が変化するとき、彼の発音の仕方の特徴も変化を蒙る

ことがわかる。この例として、アルベルチヌスの発音の臨床的診断の一つを引用しよう。

「話しているときのアルベルチヌスは、頭を不動のまま保ち、鼻孔を引き締め、唇の先だけしか動かさない。そのため、調子がただらしで、声が鼻にかかるのだが、そうした声調を構成しているもののなかには多分、地方的遺伝、イギリス人の粘液質の若年の気取り、外国人家庭教師の教育、肥厚性鼻炎などの要素がはいっているのだらう。こんな発声法は、しかし、彼女が、相手をよりよく知り合つていくときには、すぐに中止されて、自然と、もとのあどけない調子にもどるのだが、そうでないときはやはり不愉快にひびいたにちがいない。」

「失われた時を求めて」における

作中人物の言語について (その二) 「次号」

Ⅱ 語彙と統辭法

■ その方の見地よりする概観